



7 香川勝廣 かがわかつひろ 明治三十九年帝室技芸員拝命

《和歌浦図額》 一面

明治三十二年（一八九九）
四分一ほか、彫金・象嵌
本紙五四・七×七六・〇

本作は、当初御下命による制作が内定していた彫金家加納夏雄が明治三十一年二月に急死したため、その補欠として夏雄の弟子であった香川勝廣が制作したものである。ただし、夏雄は「金属額面片切彫海辺松衛之図（須磨額面）」という額形式の作品を予定していたが、勝廣は額形式については引き継いだものの、図案は勝廣が新たに考案して、豊川秀静が描いた下図に川端玉章が手を加えて完成させた（「香川勝廣氏の大作」『読売新聞』明治三十一年八月二日）。『万葉集』に収録された山部赤人の歌「和歌の浦に潮満ち来れば潟をなみ葦辺をさして鶴鳴き渡る」をもとに図案化したものである。本作のような額装形式の彫金作品は、工芸品においても開催国フランス側の美術の枠組に近づけようとする意図のもとに採用された形態であった。

一見すると絵画性の強さに目を奪われる本作には、その各所に勝廣の持てる彫金技術の数々が尽くされている。飛翔する群鶴には銀や四分一（臙銀）、赤銅、朱銅などを組み合わせて高肉象嵌し、前景の堤、砂浜、波、そして空はそれぞれ色味の異なる四分一を張り合わせている。また、葦や波が打ち寄せる岩のほか、波のしぶき、砂浜の砂地など細部に至るまで象嵌で表わす。これらの処理により、単に図様が立体的に見えるだけでなく、金属の持つ色彩を十分に生かすことに成功している。それだけではなく、師・加納夏雄譲りの片切彫により流麗な曲線で波を彫り出し、鑿を絵筆のように使いこなす高度な技術をさりげなく示しているのである。完成後に勝廣より提出された説明書には、特に技能優秀な工人四名を選抜して一年余りの日数を費やして制作したとある。



万博第15部(各種工業品)会場での陳列写真。「和歌浦図額」はイーゼルに乗せて展示し、その下に「MEDAILLE D'OR」(金牌)の札が置かれている。(『農商務省編』千九百年巴里万国博覧会臨時博覧会事務局報告『明治三十五年より』)

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

皇室技芸員と一九〇〇年パリ万国博覧会

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 47

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十年七月十九日発行

© 2008 The Museum of the Imperial Collections